



ICT 環境・協働学習がデザインされた教室群

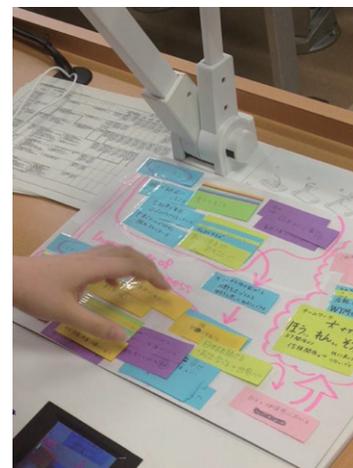
新キャンパスと新しい学び

2015年春の東海キャンパス開設に向けて新校舎での「学びのデザイン」は確立し、建設も急ピッチで進んでいます。世界と交わりながら、世界全体の幸せを考え、学び、実践していく本学学生の学び舎となり、その力を十分に発揮できる学習環境の整備が進められています。何よりも一人一台の端末を活用し、自分育てを支える環境が整っています。プロジェクトの画面が投影できる壁をデザイン

した小教室。Active Learning Laboratory (ALL) と呼ばれる協働学習用教室も多く設置されます。国際事業展開企業、青年海外協力隊、英語教員としてこれまで巣立った先輩たちも、協働で問題に立ち向かい、新しい智を得て問題解決に取り組んでいく、本学部の学びの手法は、それぞれの分野で高く評価されています。

名古屋駅から15分程度、毎時10本程度の利便性も大きな魅力です。

学びの方法を身に着け、協働の持つ力を実感しながらプロジェクト学習に取り組んでいきます。人を大切に、新しい智を生み出す学習方法、協働する力は社会人基礎力として大切にされる力です。



協働の中で KJ 法を学ぶ

目次

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 国際フィールドワーク I 報告 | 6 先輩の進路紹介 |
| 4 国際フィールドワーク II 報告 | 社会人経験を経て国際協力の現場へ |
| 5 留学・インターン体験記 | 第一期卒業生 丹羽 俊策 |
| ロンドンで知った Cool Japan | 7 担任として頑張ってます！ |
| 3年 高澤 ほたる | 第一期卒業生 藤井 愛子 |
| 国際協働インターンシップでの学び | 8 今年度も予定満載！お知らせコーナー |
| 4年 牧野 詩音 | 国際交流イベント、英語セミナーなど |

国際フィールドワーク I 報告

1年次の集大成、2014年2月中旬より3月上旬まで国際交流フィールドワーク I (1年時の全員履修科目) が実施されました。

カンボジア、マレーシア、フィリピンなど海外連携校を訪問しつつ現地の NGO や企業、学校を訪問します。政治、歴史、文化の学びは当然ですが、人にとって「しあわせ」とは何か、世界中で支えながら豊かに生きていくその手法は何か、多くの課題を持ちつつ、

今後の大学生活をデザインするためのフィールドワークです。

■カンボジア

学部長 教授 影戸 誠

◆訪問先を使い捨てにしない

訪問先での貴重な体験も今後にかすことができなければ、楽しい思い出作りのために相手を利用しているに過ぎません。「観光搾取」とも言えるこうした事

態を避け、着実に成果を掴み取るよう、次のステップを踏んで研修に臨みました。

See…事前準備として、日本との関係で相手国をとらえる学習。GNP 比較、福祉制度比較、教育制度比較など、基本的な事項を知るために学習します。

フィールドワークにおいて、「英語」で「日本を語る」「保険制度を語る」「思いを伝える」ために、語学学習にも挑んできました。

Feel…現地で人々に接し、言葉を交わしながら、「貧困」「開発」「マネジメント」について考えます。

Internalize…教師や、友人との語り、学びの中で自分の学びを振り返り、さらに深める方向性を明確にしていきます。



電気の無いカンボジアの教室で「学ぶこと変わることを感じる」

▶ 研修に参加した学生たちの声を紹介します。

◆伝統の森「クメール伝統織物研究所 (IKTT)」訪問 2年 山田 桃子

伝統の森

設立者森本さんは、内戦でとだえかけたクメール絣(かすり)の復興のためこの森(村)を作った。田舎で仕事がない女性のための生活基盤を作る・必要な材料を全て自分たちでまかなうための森だった。その森には現在は150人以上、38家族が生活をしている。

人が自然と呼応しながら生活し、生きていく仕掛けが組み込まれている。23セクションある仕事の全部をできる人が多い。教科書などはなく全て頭の中であり、新しい人たちには直接伝えている。私たちはいくつかの作業を見学させていただき、ハンカチの染色体験を行った。

ヒューマンメイド

IKTTで作られているクメール絣は、ハンドメイドではなく、人の気持ち・心がこもっているヒューマンメイド。強制してやる仕事は心が入らない。そのような心を大切に、世界一と言われる物づくりを行っている。一番大切な物は心であり、心がこもっていれば見る人はわかってくれ作品を評価してくれるという。

IKTTでは買ってもらう人に直接現地に来てもらい、さわってもらい、見てもらいお客さんと接してから販売をしている。作業場では子供たちがそばにいる。世界一の物を作れる秘訣は子どもと一緒にいられることで安心して働くことができるからだとおっしゃっていた。実際に見学していると、子どもが近くにいる、とてもおびおびと作業をしているように感じた。子どもにとっても、音やリズムで知らないうちに技術の伝承があるように感じた。



クメール絣の作業場

まとめ

伝統の森では、とても心や気持ちを大事にしており、心をこめて行うというのが印象に残った。また、問題の発生は歓迎すべきであり、解決によって前進できると述べていた。森で生活すること、変化成長することの意味を見たような気がした。

「出会い」「チャンス」は新しいステージであるという森本さんの言葉に、私たちもこの訪問をきっかけに新しいことをしていきたいと思った。



IKTTの子どもたちと

■フィリピン

教授 野崎 泰志

フィリピン大学ソーシャルワーク地域開発学部が全面的に18日間の学習プログラムを準備してくれるのがフィリピン研修の特徴である。それは講義と大学が関わっている活動現場訪問、幾つかのNGOやJICA訪問、振り返りセッション等によって構成されている。講義は、フィリピンにおける開発、フィリピンの貧困対策、参加型開発、農村開発、都市開発、フィリピン日本関係史と、バランス良く配置され、それらに直接関連するスラム住民の再定住地や、地方政府が住民参加型で進める地域開発の現場へ学生達は訪問し、直接に住民やソーシャルワーカーやその実習学生や市長も含む行政担当者と交流することができる。

始めは英語の講義についていくのがやつの学生達も徐々に慣れていく。特にホームステイを終えるころ

からは、若者同士の交流によって一気に空気が変わってくるのが分かる。学生達は、講義や訪問先等を分担して記録し、自分のテーマのレポートとホームステイのレポートを書かねばならない。また、問題意識によって「持続可能な開発」「人と人のつながりとしてのコミュニティ」「子どもの幸せ」という三つのグループに別れ、最終日に英語でプレゼンをした。最終発表の直前は数時間の睡眠時間でこれらを全員で完成させ、その中身の濃さがフィリピン大学の先生方をうならせた。



英語でプレゼンをする学生

どの学生も確かな手応えと友情を携えて無事に帰国した。例えばある女子学生は以下のように自分のテーマのレポートを締めくくっている(以下、学生のレポートからの抜粋)。

私はフィリピンに訪問する前の事前学習で、フィリピンにおける男女平等のためには教育と健康の面で向上しなければならないと目途を立てていた。しかし実際に訪問してみるとその2つだけでは問題は解決しないことがわかった。しかしその根底にあるのはやはり「貧困」である。貧困ゆえに農業で何とか生計を立てているから医療サービスへアクセスできない、貧困であるから日本へ出稼ぎに来て日本人男性に見捨てられ社会的地位が低下した貧困になる、貧困から抜け出せない男性が女性に当たってDVやレイプをしてしまう、など。しかし一方で彼女たちは自身の置かれた立場を自ら理解し、強く権利を主張している。顕著な例はOne Billion Risingで、上記で述べたように世界的に有名な運動で先進国でも展開されている。

このレポートのタイトルを「フィリピン人女性から日本人女性が学ぶべきこと」にした。私たち日本人女性がフィリピン人女性から学ぶべきこととして現時点での答えを出すとするならば、まずは「知る」ということだ。女性に限らずフィリピンの人々は自身の置かれた状況をきちんと把握しており、社会参加をしようという意識も高く持っている。一方で女性に限らず日本人は私自身も含め、日本の政治や経済すらもわかっていないし知ろうとすらしない。そのような中で自身の



女性支援のための施設にて

権利主張など出来なくて当然だ。日本人の女性はまず知り、例えば育児休暇制度やその後の社会復帰について主張するのであれば、国内と海外を知り比較した上で改善してほしいと訴えるべきであると私は考える。

■マレーシア

教授 岡本 真理子

帰国後の学生達のレポートを見ると、参加学生がマレーシア研修で得たものは、とても大きかったようだ。初めて海外に行った学生は特にそうだ。バディ学生の親身になってのサポートやホームステイ先の温かいもてなしを通して、マレーシア市民との密度の濃い交流をする機会を得て、海外渡航への自信がつき、引っ込み思案の性格自体が少し変わったという。

「今回のマレーシア研修で初めての海外を経験した。そして、たくさんの人と出会った。初めて体験することだらけで、驚くこともあり、考えさせられることもあった。日本しか知らない自分が今まで見ていた世界はとても小さいものであった。マレーシアに行き、違った世界を見ることができ、自分の視野が広がった。自分は初対面の人と打ち解けあうのにとても時間がかかる。けれどUSMの学生は、久しぶりに会った親友のように積極的に話しかけてくれたので、自分がコミュニケーションに対して消極的ということに気づかされた。」(妹尾陸央)そして、自分のような人間の心を開いてくれたマレーシアの人がコミュニケーションに積極的な理由について「(それは)マレーシアが多民族国家だからではないかと思った。そして、様々な民族がともに生活できているのは、他民族との関係を保つことが大切で、関係を保つためにお互いの文化の特徴を伝えあったりするなどのコミュニケーションをとっているのではないかと思った。」と考察している。短期間の滞在の観察であるから結論とするには無理があるが、今後も海外の人々との交流を通して、それへの答えを見つけていってほしい。

また、日本ではイスラム教は過激派テロと結びついた形で報道されやすい環境にあるが、イスラム教を信仰するムスリムの人々の生活を間近に垣間見ることを通して、学生達はムスリムの人々とも解りあえるという実感を得たようだ。

「晩御飯後、マザーに『今晚子供たちがたくさん集



親身に対応してくれたバディ学生の皆さん

まって、コーラン（アラブ語）を読む練習をするからあなたも来て』と誘われた。リビングでは10人くらいの小学生たちが座って、コーランを大声で一緒に読んでいた。横で子供たちの姿を見ていて感動した。マレーシアでは幼い頃から信仰心を身に付けさせているのだと新しい発見だった。マザーはこのコーラン勉強会から一切お金をとらない、ボランティアでやっていると教えてくれた。」

（2年 天野 撫子）

また、ムスリムの人々が戒律を冒さずに安心して食べることができる料理や使用可能な化粧品を示す「ハラール」認証制度があり、日常的に意識しなければならないものであることを知って、日本での取り組みを独自に調べ、新たな産業の機会となりうるかを検討した学生もいる。

「今後イスラム圏内での重要な産業になって



ハラール認証されている店舗

くるのであろうハラール産業に日本は参入が遅れている。だが、日本の企業は商業や工業でマレーシア始め東南アジアに参入している。だから、もっと東南アジアのことを知って、国として理解していくべきだと思う。それには同時に宗教に対する理解が今後の課題だと感じた。」

（2年 松崎 未来）

今回の研修でのもう一つの魅力は、グローバル化時代の企業の海外での事業展開の例として、マレーシアに進出している製造業や大型小売店を視察できたことだ。視察報告担当者は次のように述べている。

「日本のSONYの進出が成功したのは、マレーシアがペナン開発公社を設立し、他国の企業が進出しやすいようにしたことが大きいと感じた。また、日本の考え方である5S（整理整頓などの行動規範）や、企業の方針をガイドラインなどで具体的に、従業員が納得できるようにしっかりと説明をし、取り入れられたことも成功につながっていると思う。アイスクリームの報酬や、従業員が会社のポスターを作るといった従業員の意欲を高める工夫や、健康診断を定期的にするなどの従業員のことを会社が考える、思いやるということもSONYの成功に大きく関わっていると思った。これから日本の企業がマレーシアに進出する時、または、マレーシア以外の国に進出する時も、このようなSONYの姿勢が大事だと思う。」

以上に挙げたのは代表的なもので、まだまだ沢山の学び・発見があった。マレーシア研修で得た事を一つの財産として、今後活かしてほしい。

国際フィールドワークⅡ 報告

国際フィールドワークⅡは、ゼミ教員などの指導を受けながら、学生自身がテーマを見つけ、計画を立て実施し、報告書を提出することで単位認定を受けることのできるプログラムです。本年度は、フィリピン、ラオス、インド、ケニアへのフィールドワークが企画・実施されました。ここでは、フィリピンで実施された活動を紹介します。

■フィリピン

教授 佐藤 慎一

国際フィールドワークⅠではフィリピンの首都マニラを拠点に活動しますが、今回訪問したのは、南部のミンダナオ島になります。学部プログラムのWorld Youth Meetingに参加した学生を通じるなどして訪問先を確保し、調査活動が実施されました。

◆フィリピンの教育・教育制度の調査

3年 丸山 祐奈

フィリピンでは、これまで初等・中等教育が合計で10年であったが、教育制度の変更により国際的な基準に合わせて12年行われることになりました。このような大きな制度変更を学生や教員がどのように受け止めているかに興味を持ち、調査することにしました。また、先生方がつながりを持っている孤児院（ハウスオブジョイ）にも訪問しながら、近隣の貧困地域に位置する小学校も訪問させてもらうことにしました。日本とは大きく異なる環境にある学校を実際に観察するとともに、現地の学校の先生方に実状や苦労や課題などについて話を聞きました。この結果は、報告書にまとめています。

写真は、University of Southeastern Philippines（南東フィリピン大学）を訪問し、現地の学生たちとディスカッションしたときのものです。教育制度の変更には、ほとんどが賛成していて、大変だけどがんばろうとしていることなど、貴重な話を聞くことができました。しかし、もっと突っ込んだことを聞きたいときに、言葉が出てこないで悔しい思いもしました。成果と課題をしっかりと考えて残りの学生生活を有意義に過ごしたいと思います。



現地学生とのディスカッションの様子

留学 & インターン体験記

ロンドンで知った Cool Japan

3年 高澤 ほたる

2013年7月から半年間、ロンドンで語学勉強とインターンシップを体験しました。

多民族を体感

イギリス、特にロンドンと日本の違いは？と聞かれたら、間違いなく一番に、「多文化！」と答えるでしょう。知識として、世界が多様化していることを知っているはいましたが、一つのまちで様々な人種の人たちが行き交っている光景は圧巻でした。英語を母国語としない友人と互いの第二言語である英語でコミュニケーションがとれたときには、言葉にできない達成感を味わいました。友達から、多様な文化や考え方を教えてもらうことで、日本の常識や自分自身を客観的にみることができました。

日本文化への誇り

私が「日本人です」というと、決まってみんな、「行ってみたい！」とか、「すごい！」と、好印象を持ってくれます。私にとってはヨーロッパの方が魅力的に思えたので、どうしてそんなに日本にいい印象を持っているの？と、ルームメイトやクラスメイトに思わず尋ねました。すると、彼らが日本についてかなり知識を持っていることがわかったのです。そして、日本文化を、他国に類を見ない、独創的でとても“Cool”な文化だと思ってくれていることを知りました。それまでは日本文化がそんなにも素晴らしいという自覚はありませんでした。日本の外に出て、はじめてその良さ、評価を実感したのです。

日本を出るといふこと

上記以外にも、楽しかったこと、大変だったことは山のようにあります。どれも、日本にいたままでは味わえなかったことばかりです。日本を思い切って出てみて、何倍も成長したと思います。同じ体験を、もっと多くの学生にもしてほしいです。



ブラジル人、イタリア人の友人と

教職インターンシップでの学び

4年 牧野 詩音

5月中旬から9月末までの約4ヶ月間日本福祉大学付属高校にてインターンシップ研修をしました。主な内容としては英語の小テストの丸つけや、配布物の印刷、授業見学であり、また学校行事やHRへも参加しました。



小テストの丸つけは慣れるまでに時間がかかりましたが、慣れていくとあまり時間をかけず、正確にできるようになっていきました。作業に慣れてくると、生徒たちの答案の中身に目が向けられるようになっていくのがわかりました。どのような問題でどんなふう間違えるのかを見ることができたので、今後自分が教員になったときにこの経験を生かしていくことができると感じました。

学年通信や委員会のお知らせなどの配布物では、先生たちは生徒たちの活動をどのように見ているのか、生徒たちの行動のどのようなことを評価しているのかがわかるものになっており、先生たちの生徒たちへの愛情を感じられるものでした。また、職員会議で使う資料や教育時事に関する資料もいただくことができたのでとても勉強になりました。

授業見学では主に国際英語コースのプレゼンテーションの授業を見せていただきました。生徒たちとの距離が一番近く、4ヶ月間のインターンシップを通して一番よい人間関係づくりができたと思っています。WYMやFWで培ったプレゼンテーション力を生かすことができたので、少しは力になれたかなと感じています。

今回のインターンシップの中で私の一番の学びは「生徒から学ぶ姿勢」です。文化祭の前日に、クラス内一部でもめごとが起きました。クラス委員の一人が仲介役となり渦中の子たちの話を聞いていました。そのクラス委員はその話をクラスに持ち帰り、みんなの前でその話を一生懸命していました。最終的にクラスのみみんなも状況を理解して、次の日の文化祭本番に向けて雰囲気もよくなりました。その話し合いの後、その委員が私に、「みんながわかってくれてよかった。気持ちが伝わってよかった。みんなに感謝だ」と言ったのです。きっと私がその子の立場だったら、面倒なこと起こさないでよ、という思いが真っ先にきたらろうと思います。あの状況でクラスメイトに感謝できるその子は、ほんとうにすごいと思いましたが、それだけでなくその子の思いをくみ取って協力しようと決めたクラスの他の子たちも素晴らしいと思いました。リーダーがいてフォロワーがいて集団が成り立っているのだと痛感した出来事でした。

先輩の進路紹介

社会人経験を経て国際協力の現場へ

第一期卒業生 丹羽 俊策

私は卒業後、2年間の会社員生活を経て今春、青年海外協力隊へ合格しました。同時に本学大学院国際社会開発専攻（通信制）に進学し、学部生時代に学んだ知識に、さらなる磨きをかけつつ、青年海外協力隊の訓練に向けて日々学習しています。海外ボランティアへの憧れは、学部生として国際協力を学ぶ中で常に頭の片隅にありました。「いつかチャレンジしたい!」という思いが叶い、とても嬉しく思っています。

◆会社員生活をしながらの学び

私は卒業後、愛知県内の中小企業に就職しました。会社員をしながらも、学生時代からの情熱を持ち続けたいと思い、週末は名古屋 NGO センターの「ファシリテーター育成プログラム」に参加し、国際理解教育に携わってきました。



その縁から、日進市にある国際 NGO アジア保健研修所にて、ワークショップを行ったり、会報の編集委員を務め、

社会人生活を送りながらも、国際協力を学べる環境を模索し続けました。

◆いざ夢の青年海外協力隊へ

そうした実績が認められ、青年海外協力隊「コミュニティ開発」隊員としてインドネシアへ派遣が決まりました。



アジア保健研修所でのワークショップの様子

1度社会に出た身として、不安もありましたが、夢を諦められず挑戦しました。10月より福島県二本松市の訓練所に入り、約3カ月の訓練の後、インドネシア南スラウェシ州マロス県で2年間の活動予定です。

◆大学での学びの大切さ

青年海外協力隊に合格して気がついたことは、実に

大学での学びが充実していたことです。中でも国際フィールドワーク II でラオスの農村で調査を行ったことや、カンボジアの CJCC (カンボジア日本人材開発センター) でインターンシップをさせて頂いたことは、強く印象に残っています。多くの方に支えられて海外で貴重な体験を得ることができたのは、この学部ならではの経験だと思います。

海外フィールドが豊富で、学生が何かアクションを起こそうとする際、バックアップしつつ、しっかりと指導して下さる先生方に巡り会えたのは非常に幸運でした。この学部にはそうした環境が整っており、学部で得た学びが現在の私の基礎を築いていると感じています。



◆東日本大震災でのボランティア活動

在学中は、学部を超えて様々な教職員の方にお世話になりました。4年目のスタート間近に起きた東日本大震災でのボランティア活動は、大学生活を語るなかで欠かせない経験の一つです。普段から途上国へ思いを向けてきましたが、母国である日本が直面する大きな危機に、多くの学生、教職員が立ちあがり、協力してボランティアを行ったことは、一生忘れることはありません。



◆大学院での学び

前述したように、私はいま日本福祉大学大学院国際社会開発専攻の修士課程で学びながら、協力隊赴任の準備をしています。通信制なので、世界中どこでもインターネット環境が整っていれば学習を進められます。そして何より、学部で出会った魅力的な先生方の講義を再び受けられる喜びも日々感じております。

まっすぐと私らしく、これからも国際協力の道を少しずつ進んで行きたいと思っています。

担任として頑張ってます！

第一期卒業生 藤井 愛子

◆担任教員として働く幸せ

岩倉市立岩倉中学校で非常勤講師として1年働かせていただいた後、昨年度より正式に採用され同校にて勤務させていただいています。本年度は1年生の担任を持たせていただき、毎日大変充実した日々を過ごしています。生徒の中学3年間のうち、大切な1年間を預かっていると思うと責任は大きいですが、私が彼らにできる最大限を尽くそうと日々奮闘しています。道徳や学活、総合などの時間に自分の教師力が出るように思います。なかなか思うようにいかず、悔しい思いをすることも多いですが、担任クラスの生徒たちに支えられてなんとか学級を運営しています。子どもたちには、「中学校は大人になるための勉強をする訓練の場」だと伝えていきます。子どもたちに未来で輝いてほしいという願いのもとに、そのためにはどんなアプローチができるのか考えるようにしています。

◆英語科教員として

英語を教えたくて、中学校の教員を志した私が、生徒たちに一番伝えたいことは、「英語はコミュニケーションのための道具」だということです。英語を学ぶことをゴールとせず、英語を使ってコミュニケーションをすることを目指しています。英語を使うことの楽しさを実感できるよう、会話練習を増やしたり、授業の中で自分自身の体験談を織り交ぜたりしています。現在は1年生の授業を4クラスと、特別支援教室の授業を1クラス担当させていただいています。英語を使う楽しさを伝えられる授業の工夫をこれからもさらに勉強していきたいです。



◆部活動で伝えられること

技術も知識もありませんが、水泳部の顧問として、日々私が彼らにしてあげられることは何か模索しながら指導をしています。個人の記録に挑戦し、ひたむきに努力する彼らの姿にいつも感銘を受けます。少しでも一人一人が最後の大会でそれぞれのベストが尽くせるよう、サポートしていきたいです。



◆採用試験について

二度目の採用試験で合格をすることができました。非常勤講師をしながらでしたので、時間の使い方を考えて勉強するようにしていました。休日は1日図書館で勉強をしたり、常に単語帳を持ち歩いたり、自分が集中して勉強できる工夫をしていました。その時も、学生の時に読んだ本や、まとめていたノートが大変役に立ちました。また、共に採用試験に向けて努力する仲間を見つけ、模試や採用試験対策のセミナーなどの情報交換を行っていました。1日何時間も勉強したあの時の苦しさが、今となっては子どもたちに学ぶこと、努力することの大切さを伝える良い経験となっています。

◆国際福祉開発学部でまなぶこと

国際福祉開発学部で教員を目指して頑張っている皆さんには、ぜひ素晴らしい先生方や、仲間との時間も大切に、さらには良書に触れて人間性を高めること、様々な経験をするをしてほしいなと思います。たくさんの人と出会い、意見を交換しながらいろんな価値観に触れることが、必ず教師として働きはじめたときに自分自身を助ける強みとなります。

英語を学ぶ環境も充実し、様々な教授法を教えたいいただき、それを実践できるこの学部の教員養成コースだからできることがたくさんあると思います。そのすべてが今の自分の糧となっており、本当に感謝しています。

自分が育てたい子どもの姿を念頭に置けば、おのずと何をしなければならぬか見えてくるはず。学生の皆さん、応援しています！

大学での模擬授業では、いろいろ工夫を凝らし、わかりやすい授業を展開していました。芯はしっかりとし、生徒に寄り添うことのできる学生でした。

指導教員 教授 小倉美津夫

今年度も予定満載！ お知らせコーナー

◆ World Youth Meeting 2014 (第16回)

日時 2014年8月7日(木)、8日(金)
場所 日本福祉大学美浜キャンパス文化ホール
テーマ Ingredients of Happiness (幸福の要素)

物質の豊かさがどの国にももたらされようとしています。しかし、物の豊かさが、幸福への導くのでしょうか？豊かさの中で鬱病に苦しみ、人間関係に悩む人も増えています。幸福学やポジティブ心理学という分野では、人と交わり、人にやさしく、そして自らの人生を生きることが重要と示唆しています。海外からやってくる学生、高校生達と、幸福に満ち溢れる生き方について論議していきます。

準備は着々と進められています。先日はフィリピンのミンダナオ国際大学と結んでSkypeによるテレビ会議を行いました。来日前の交流、来日時の交流とプレゼンテーションなどが打ち合わされました。



ICTと国際連携：授業においてテレビ会議を通じてフィリピンと打ち合わせている様子

◆ 高校生セミナー開催のお知らせ

今年も暑い夏がやってきます。高校生の皆さんの英語力向上に向けて、今年も日本福祉大学から、ア・ツ・イ！エールの贈り物です！予習や復習で不足していたこと、こうすればもっと効率よく英語力が向上する方法など、英語学習へのヒントが一杯です。

日時 8月10日(日) 午前10時～午後3時
場所 日本福祉大学中央福祉専門学校 (JR及び地下鉄鶴舞駅から徒歩5分)
対象 高校生(1年生から3年生まで)
内容 センター試験対策、英語に対する苦手意識は勉強方法で克服できる、など、英語力向上や英検合格のためのヒントが一杯。
費用 無料
講師 グローバル企業での英語研修、英会話学校、通訳学校、予備校などでの豊かな教授経験を持つ先生方です。

申込み・問合せ先

日本福祉大学英語学習セミナー事務局
〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田
TEL: 0569-87-2212
FAX: 0569-87-5849
E-mail: nfu-ad@n-fukushi.ac.jp

◆ 高大連携英語教育セミナー開催のお知らせ

本年も、下記の通り、先生方を対象としたセミナーを開催いたします。来年度(2015年4月)から国際福祉開発学部が東海市に移転することもあり、今回は、東海市での開催となります。



昨年度セミナーの様子

お陰様で、何人かの卒業生が中学高校で「先生」として活躍しています。皆様との連携は、私ども国際にとって、とても大切なことであると教員一同思っております。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

日時 8月11日(月) 午前10時～午後5時
場所 東海市民活動センター (名鉄太田川から徒歩1分、ソラト太田川)
対象 中学、高校の先生方、その他英語教育、国際理解教育に関心のある方
内容 「協働学習、プロジェクト学習とICTの可能性」、「学びを通して互いに理解しあうー東ティモールにおけるトイレプロジェクトの体験からー」、「教師のための英語力アップ講座ー学習指導要領の骨子を英検準1級、1級レベルで展開するとー」、「CLILと時事英語ー英語教授の基本」、など。
講師 影戸 誠、中西 哲彦、Edward Scruggs (日本福祉大学)、佐藤 邦子 (JICA 中部)、他
申込み・問合せ先
日本福祉大学高大連携英語教育セミナー事務局
〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田
TEL: 0569-87-2212 FAX: 0569-87-5849
E-mail: nfu-ad@n-fukushi.ac.jp

◆ 夏までの授業外国際交流事業

- ・6月2日～3日：シンガポールのイーミン小学校の生徒に日本文化体験の企画実施
- ・6月26日～28日：アメリカ(ワシントン州)からクラークカレッジ大学生との交流企画実施
- ・7月10日：世界70か国から青年商工会の国際会議参加者との交流
- ・8月3日～10日：アジア7か国からの参加者と英語プレゼンテーション大会

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部
〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田
TEL. 0569-87-2211 FAX. 0569-87-1690
<http://facebook.com/nfuiwd/>

編集人：国際福祉開発学部 学部長 影戸 誠、准教授 小國 和子
お問い合わせ: wym-jim@ml.n-fukushi.ac.jp